厭蝕太平樂記

二拾貳

へ13
3553
22

門 へ 13
號 3553
卷 122

早稲田大學図書館
昭 38.11.10 受
藏 書

早稲田大學圖書

厩舎式

同 録

一 右田小笠原入れ代り風呂番
手ら及川角青年と試走

一 入場如見表彰式
手ら同場上を走る事
同場上を走る

厭蝕百年水紀卷第八

[illegible]年[illegible]京大[illegible]

[illegible]及[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大筒既に音と云大仁自て木村主水は御生れなく是ぬ馬
の用意すべし母堂幸ひとせよと申さく秀頼公の仰すれば
於ての武者なれとして左衛門佐は伊達の勢を
鉄砲の矢を放つ事共越中守覚見仰由に百ゐれた
まで馬の働をなくし剣撃しける様なれく以ての外
力の知る大坂城を先君を以て御組を以て云ふ
鉄砲の勇士とて手をそへ申さく是の蒲生(?)の
如くしとなり大助を始ふらの萬覚の別当は[illegible]
と存く義の中の浅井(?)周防守殿母公の仰よ依く

若君御勧馬のりれ懸け候べく横よ仕れど
御身乃れとの事は木村主水は左右ともに御手を
組まれる事に母君御母の八ならへ母の中半のまも改ず
と申あれバ先帝の形なる子息は御所へ参りてしとそ
木村主水後藤又兵衛大坂の城へ参り五手の御所
御母堂とて見のまの大助ともに井くて後は母の中井どれ
吟味して詰の毛の押込みにて滿中の所を付く
又の手をもって梅百なる時返大前の手を定
逆なく見の御意を立く急ぎのかしこしや委合

時の人数に及ばず面々に手負ひ疲れて
敵を追ひ出だしたる事なれば大将
天竺にいらせたまふ事なれば
新田切り切りに折れ伏せ
を始めて切り切りに切り入り
士とも所々に大勢切り
ふく山深しく退いたり及ばず
く樋の口とて
清水伯耆入道合戦
ら入れ立てさせたまふ
はいろいろ
地獄
逆さまに及ばず
伊賀
殺れ
大将所
入りとみへさせ
すぐとれられば

[illegible]

[illegible]

東海道を下りとて欲しがるまく越前へ立寄て
北国を守護せんとて浦々島々を尋ねて海辺の
蔵どもを打破て牧ひしてい小京進んとて兵粮
を出さんとて時を急ぎ城崎を打越
丹波を打越切て落ぬ切て落ぬ
能登守の北条小太郎高時と等々に
切腹切腹切腹と云ふ物者ども
御合戦をぞ仕る

未だ北国を出ざりける処に遠江遠
江未だ安堵ならざりける処に
北国を押領しける時紀伊国
とて国々の武士を
小京北畠殿に参ぜ
ん為とて
京へ
上り
給ひ
ける
程に
北畠
殿
の
小
京
へ
入
給
ひ
て
後
醍
醐
帝
の
御
宇
に
成
て
汗
馬
の
功
を
抽
ん
ず
る
者
共
又
時の
新
田
義
貞
の
城方
に
成
て
汗
馬
の
功
を
抽
ん
ず
る
者
共

大臣是より兵庫の陣にて九万の勢をもつて是を守りく
鉄砲弓矢を射かけ給ひし時は中にも二万余騎の者を引具して忍びてよ
ひそかに我身をかくして城のうちへ入り給ふと聞えし程に世間のさわがしく
十方に乱れし時節には敵ども追ひ来りてとらへんとす
にて名を替へて身をかくし中にもいそぎ夜ぬけしてのがれ給ふ
然れば公方の家中にも其外の近習の臣下まで皆々恐れをなして雨気深
真木浦の名将たる人々もひそかにのがれ出でて大勢の兵を具してかけ来り
かれらは公方の御前にまかり出て合戦の次第をくはしく申上げ
又是を見て家中の者ども皆々退散して後にはわづか二三騎ばかりになり給ふ

其かくれ家をたづね出して後に是を召捕り給ふ
かくの如き事ども見及びて毒害の事を仰せられけるを
先達ての事どもを案じて毒害を其身に仕懸けん
とて承りて出でけるは先例をしるし給ふ
村上の侍大将なりける者ども皆々平伏して退き
重村河内守殿も其身の家来を引具して
大勢をもつて押寄せ、其外の者ども悉く公方の御首を
取りて京都へ上りけるに此由を聞きて皆々驚き
日数経て後に其事あらはれけり

五月二日千早の到

浅井周防

永井右馬允

とりたれば番所をもすてゝ城へ籠る程に

ほどなく番所をもすてゝ向ひ合ひ合ひ城へ

逃のれば城と雖もをくれ行しかれ共毒害せ

ら[illegible]ら城よりせめ[illegible]ゝ[illegible]

くをほろぼす人[illegible]城者共[illegible]

とりく[illegible]ゝ[illegible]

新田を守護し[illegible]

ふ八月廿八日[illegible]年の[illegible]

[illegible]

守と大将[illegible]

[illegible]

後[illegible]

金[illegible]

数[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大塚姫見妻[illegible]

付 見塚に[illegible]

[illegible]

猶甚し地に旋風吹来れバ咫尺を弁ず海[illegible]のごとく
兄ゟハ雷の雨を遁れて川のごとく[illegible]
篠塚ハ[illegible]寄せて[illegible]食を給ハずして[illegible]
少将[illegible]ハ手負て[illegible]落ちけるが[illegible]
後く[illegible]大将軍[illegible]軍勢にて
[illegible]を[illegible]して[illegible]なかりければ兵卒とも[illegible]
敵を遁て[illegible]兵粮[illegible]
[illegible]と[illegible]ければ[illegible]泥[illegible]
[illegible]と[illegible]

時雨の[illegible]私に谷[illegible]筏[illegible]進まで
[illegible]侍と[illegible]時ハ大[illegible]
伊予[illegible]夜[illegible]
と[illegible]ハ麦飯の[illegible]
[illegible]別[illegible]
[illegible]
く[illegible]飯を[illegible]さす
[illegible]忽ちに[illegible]
[illegible]

自身申しける如覚源之所司と宅を附け不絶日参する
にぐうんれバ属もすく竹も少が〻らず衛府の御なし
諸とや仰せ與りまゝ様子を解く候ひて出家無不れ承り候
養子孫あ参らずきく先を見みおぼしめし今日より大攻
おもしとすり相し大仰付まく残らせも少出庫されと
存じもれるかゝる時に何申人心を勤めまゐらせ及ぶ
出家とめ〻れさせて硯と紙を御かゝへ〻入得させて
ときく書せしむ書文ならひ

文月二日 経夜一家和菓子処之方

浄品茂浅之進殿へ隠岐守遂よ

日野守一

大塚如覚れ

と書くもの又る後へ筆の紙を合せ浅み所作かねてれ
大名の家中にて残らず武士の附まき剣あり自ら申して
御座をかくしおき女にはうわ言ひ人若殿様を強
とく御名を乙さし出し又日野守一と書しまた
右書判を出し候て君の様子あそバさせるやうにしとまる
中に程とすり候の所の南を召しく力を渡しける

中根隼人方ヨリ注進ス

紀州根来寺衆徒ノ謀反ヲ企テ、清水ヲ堰キ、
返シ堀ヲ掘ル事ヲ知セ、
[illegible]ヲ[illegible]ル[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]ル[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]ル[illegible]

宮方のちかるべき乱もなく殊に恐れて進み出すも
ともに近く参りて昔に恐れ入り書状をとつ
しけるまゝ時にかの附人は宮様を将れ出
次し殊にとりどりに康しれば伊賀は心を残して
程なる張の死んで是を食とし心地
たりけるゆえに其にて此は心を城上もと伊賀
猛兵とけれども全手を宇に出大和守道氏
於是伊勢守文小笠原右近将監氏頼河越
日雅と是に近江前司大石前を率ゐる手勢

道をかぎり難儀の者ども山賊かくして悩まさるゝを
遂に郷の守護夜道を急ぎ旅人は夜を分く
生国が心もいかで将軍に宿の木あかなく母又
かの渡る者の跡を将軍に参りて来る歌をよみ
在れども来よし母は附の残りを参らせたり
先年此海鎮めしとて上るか様に大将軍参りて
君を様々に恐れ多く将軍御当所の道に先手
様々に守護の手わたし国司殿に舟づて渡しに添く
山のみ谷の風を伏して縁りんと為行せ親ら気を付

注進のごとく武蔵より三浦の城のごとく拵へけらし
後北條の毒をもって例の如く家内と揆に存意帰之
千の目ありし者なれ菜印し共に忍せらし水て不止ふ
阿弥陀如来なれバ三枝の家内注意追加ん追し給し
表て退られバ北條ハ此の安庭常になれ家内ょし
其ぐ但此是大将ゆえかく本陣にて備大将軍ゆえ
く伊勢氏しくいまだこれらの家内より座敷宮守一接
ぬたまふく川なる大丸そいとて大将くんと川丸は平伏て
三浦の氏の家内をしる事も蘭奢待天海大僧正の寄まくなど

いつれも大手殿鳥居ハいつくよりの庭へあそびにくると
後にえらびて是をもの子細に帛をしるしてなれ共おもふて持参して
山崎ふ谷にもかれハ無れし本ふ大石の鑓を田ひく
先に延文の御浦とかくらく大將の間にあるにはかれバ大将ど
但ぐ都を英氣をさまたげらるる事ハ大久保忠世に法
しく他より此をすれおもそ乳をひめたき有りに見し
注は中ハ容貌をみるをとかれバ近習ハいかにもなさで
一同ハの被ありに店備気とも附し無れ先のやうよ
けるきもくとそへしとかさまるるに安寧し　いつれも

く武将弓芸(ぶしやうきうげい)にたけたる揃の名にし浅井の剛猛(がうまう)を恐(おそ)れてかく
之段の由を聞すかさず我家の存念をのべ浅井久政公京極家を
氷井往還を留むべからず是ハ姿(すがた)をやつし窮民(ひみん)に
依て太田時強臣の大将肱(かじ)戻りとて大名に
浅井織田信長公に追従(ついしやう)せず陥没信長公の本陣に至る
信長公三度まで是を味方にまねかれしか共浅井父子ハ不肖(ふせう)
若年のことなれバ年寄どもの勧(すゝ)めにまかせ又忠節を守るを
専(もつぱ)らに心を尽し宿(やど)を揃(そろ)へて籠(こも)る
れバ浅井の城を固め江州(ごうしう)小谷の城中に信長公を

君臣一致の合戦なれバ甲冑(かつちう)を帯し勢を揃(そろ)へて大いに尽し
給ふ全く是を中国流(るい)の軍法とす
此時織田の人数(にんず)さしも大勢なれども又浅井の小勢(こぜい)なれ
大将にて浅井の長政の男女(なんによ)に至るまで
これ迄(まで)に彼(かの)族(ぞく)の兵卒(そつ)をもつて其(その)軍勢(ぐんぜい)を
集めて其の手を以て要害を構へ三方の陣を敷て守り
されバとて敵(てき)の大軍に対(たい)し数日を
信長ハ味方の兵の半(なかば)を以て攻めらるゝに
小谷の城中の兵ハ皆浅井の家臣なれば

し織田信長の返答を加助に言ふ聞せられ
ども所詮返答なきうちにはやくどりの
家に行て家を焼かし武道を立る者なれと
合戦の人数に成を家ぐんとくひそろ飛ぶ
掃よ雲霞の如くはふ出を浪斯をす
られ信長よりの助に成信長公能仕を
ひそうよりんぐ田信勝公ふすりか掃られ
美濃をかくりられば味方大家もとる成信長後
夫所詳くきれば絶ることを感ずれることを

ものに成れとこれを助に遣ふ時
ふ時に成一家に成ずとかくて和を
家りもこれ信長をとく待遣ふ間ふく後
方ものれ自人ゆてふ家をかんで合戦ものを
こひ打とくくれとこれと信長ひ成ふ合戦
一所信ふのく助ものふ大ふ敗成
孫ごくやのしつ家ものふ大将養を知也
あひくひ和くこ日に遣間もくあり相ものを家地
海ふ御田助ものふ和ふ海ものふ地信長ふ

[illegible]の切ってすてられでも近江国と尾張国との
間を幸ひとしや[illegible]知恵[illegible]
[illegible]ん[illegible]と[illegible]
[illegible]ひられば幸ひとして[illegible]
すべき海[illegible]海賊[illegible]
中[illegible]ども海[illegible]
[illegible]といって[illegible]
[illegible]
代[illegible]

[illegible]
中[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]